

— 原著 —

周術期等口腔機能管理患者の口腔内状態ならびに生活習慣

成松花弥, 飯田明彦, 小林孝憲

長岡赤十字病院歯科口腔外科 (主任: 飯田明彦部長)

Oral condition and lifestyle of the patients
under perioperative oral management

Kaya Narimatsu, Akihiko Iida, Takanori Kobayashi

*Department of Dentistry and Oral Surgery, Nagaoka Red Cross Hospital**(Chief: Dr. Akihiko Iida)*

令和2年4月8日受付 令和2年5月22日受理

キーワード: 周術期等口腔機能管理, 現在歯数, 歯周ポケット, 喫煙, かかりつけ歯科

Key words: perioperative oral management, number of present teeth, periodontal pocket, smoking, family dentist

Abstract

Perioperative oral management has recently been proven to be efficacious. For more effective and efficient oral management, we investigated the oral condition and lifestyle of the patients who had undergone perioperative oral management in Nagaoka Red Cross hospital.

The subjects were 713 patients who received perioperative oral management in 2016.

The results were as follows:

1. The average age of the patients was 64.3 years and patients over 50 years of age accounted for 85.7%.
2. The patients with malignant tumor accounted for 86.1%.
3. The average number of present teeth was 20.0 and the prevalence rate of periodontal pocket over 4mm was 74.9%. These results were worse than those in a national dental health survey in 2016.
4. Current smokers accounted for 21.7%, past smokers 33.9% and non-smokers 44.4%. The average number of present teeth in current smokers was significantly less than that in non-smokers. The prevalence rates of periodontal pockets in current smokers and past smokers were significantly higher than that in non-smokers.
5. Patients under regular check-ups at the family dentist accounted for 14.3%, those having a family dentist without regular check-ups 70.3%, and those not having a family dentist 15.3%. The average number of present teeth in patients without regular check-ups was significantly less than that in patients under regular check-ups.

These results suggested that intensive oral management is required in smokers and patients without regular check-ups. It was considered that the campaign against smoking and regular dental check-ups would enhance the effect of perioperative oral management.

【和文抄録】

近年, 周術期等口腔機能管理の有効性が明らかとなってきている。私たちは, より効果的で効率的な口腔管理を行うために, 長岡赤十字病院で周術期等口腔機能管理を行った患者の口腔内状態および生活習慣について調査を行った。対象は2016年の1年間に周術期等口腔機能管理を受けた713名とした。

結果は以下のとおりである:

1. 患者の平均年齢は64.3歳で, 50歳以上が85.7%を占めていた。
2. 全体の86.1%が悪性腫瘍患者であった。
3. 1人平均現在歯数は20.0本, 4mm以上の歯周ポケット保有率は74.9%で, 2016年の歯科疾患実態調査の結果

と比較し不良であった。

4. 喫煙者は 21.7%, 喫煙経験者は 33.9%, 非喫煙者は 44.4% であった。喫煙者は非喫煙者より 1 人平均現在歯数が有意に少なかった。喫煙者および喫煙経験者は非喫煙者に比較し歯周ポケット保有率が有意に高かった。

5. 歯科定期受診のある者は 14.3%, かかりつけ歯科はあるが定期受診のない者は 70.3%, かかりつけ歯科のない者は 15.3% で、定期受診のない者は定期受診のある者に比べ 1 人平均現在歯数が有意に少なかった。

以上、喫煙者、歯科定期受診のない者に対し重点的な口腔管理を行う必要があると思われた。また、禁煙や歯科定期受診をかかりつけ歯科医と連携して推進していくことで、周術期等口腔機能管理の効果を一層高められるものと考えられた。

【緒 言】

口腔清掃などの口腔管理により周術期合併症が減少することが明らかにされてきたこと¹⁾に伴い、2012 年の診療報酬改定において周術期口腔機能管理（2018 年からは周術期等口腔機能管理と改称：以下、周管）が保険収載された。周管の目的は医科領域、歯科領域を問わず悪性腫瘍等、周管のきっかけとなった疾患（以下、主病）の治療を受ける患者に対して、歯科医師が患者の口腔内状態等の把握、主病の治療に関連する口腔機能の変化に伴う日常的な指導等の口腔管理を行うことで、治療に際して生じる有害事象を予防あるいは軽減し、さらに患者の口腔環境や生活習慣を患者自身にも啓発した上で、主病治療後の健康維持、向上に寄与することである。周管は保険収載後、多くの医療機関で行われ²⁾、患者数は年々増加傾向にあり³⁾、周術期合併症の減少^{4,7)}、在院日数短縮や医療費削減⁸⁾などの効果が明らかとなってきた。管理計画の策定にあたっては、患者の口腔内の状態、生活習慣、基礎疾患の状態などに配慮することが求められているが、これらの実態について調査した報告は見当たらない。そこで今回、より効果的で効率的な周管を行い、主病治療後の健康維持、向上にいかにつなげるべきかを考察する目的で周管患者の口腔内状態ならびに生活習慣の調査を行った。

【長岡赤十字病院における周術期等口腔機能管理】

長岡赤十字病院（以下、当院）では、2012 年 4 月の周管の保険収載に先立ち、対象疾患ならびに管理方法等について、医師、看護師などの職員を対象とした説明会を開催し、患者の紹介を促進した。

当院では周管を行う専門の部署は設けず、周管対象患者は、主病を治療する主治医の判断によって歯科口腔外科（以下、当科）に紹介されるシステムとした。したがって、当科受診前に患者の口腔内スクリーニングは実施されていない。また、患者の多くは歯科的介入を希望して当院を受診しているわけではない、いわゆる歯科的訴のない患者である。

このように紹介された患者に対し、当科受診時に問診、口腔内診査、1 点法による歯周組織検査および画像検査を実施し、管理計画を立案する。主病の治療前に機械的歯面

清掃などの専門的口腔衛生処置、歯石除去など必要な歯科の処置を行うとともに、患者の状態に応じかかりつけ歯科に診療情報提供を行い、継続した口腔管理を依頼している。

【対象ならびに方法】

対象は 2016 年 1 月 1 日から 12 月 31 日の 1 年間に周管の開始時に 1 回のみ算定する周術期口腔機能管理計画策定料を当科において算定した 713 名とした。

調査項目は、年齢、性別、依頼元の診療科、主病、初診から主病の治療が開始されるまでの期間、喫煙の状況、歯科受診状況ならびに当科での管理内容について診療録から抽出した。喫煙の状況については、当科初診時に習慣的に喫煙している者を喫煙者、過去に習慣的に喫煙していたが現在喫煙していない者を喫煙経験者、喫煙歴のない者を非喫煙者とした。歯科受診状況については、かかりつけ歯科があり定期的に受診をしている者を定期受診あり、かかりつけ歯科があるが定期的な受診をしていない者を定期受診なし、かかりつけ歯科がない者をかかりつけなしと 3 群に分類した。

口腔内状態は、初診時に口腔内診査、1 点法による歯周組織検査および画像検査を実施し、現在歯数、WHO の CPI 代表歯（ $\overline{76}$ 、 $\overline{67}$ 、 $\overline{76}$ 、 $\overline{167}$ ）のうち最も深い歯周ポケットの値を調査した。歯周ポケットについては、4mm 以上の歯周ポケットを有する者を歯周ポケットありとした。歯周ポケット保有率は、周管患者全体では、歯科疾患実態調査の結果と比較するために、歯科疾患実態調査と同様に無歯顎や残根のみを対象歯のない者も含めて算出した。一方、喫煙の状況および歯科受診状況による比較においては、対象患者に高齢者が多く、対象歯なしの者を加えると見かけ上の歯周ポケット保有率が減少してしまうため、対象歯のない者は除いて算出した。また、必要な歯科治療を受けているかどうかの指標として、欠損補綴の状況ならびに必要性について調査した。すなわち、欠損歯を有する者について問診や口腔内診査から可撤性義歯の使用状況を確認し、すべての欠損歯が補綴されている者を補綴済みとし、未補綴部位のある者については経験 5 年以上の歯科医師 2 名がパノラマ X 線写真をもとに補綴治療の必要性について評価した。評価はそれぞれ 2 回ずつ行い、4 回の平均値を結果とした。また、評価者内および評価者間一致度を求め、結果の信頼性についても評価した。